様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月　 ８ 日現在

機関番号：１７５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０４８５

研究課題名（和文）内容類型学からみた沖縄諸方言

研究課題名（英文）The Okinawan Dialects Analyzed from the Viewpoint of Contentive Typology

研究代表者
田畑　千秋（Tabata, Chiaki）

大分大学・教育学部・教授

研究者番号：６０２６４３２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：ゲ・ア・クリモフの提唱したContentive Typology(内容類型学）の視座から沖縄諸方言を再調査、再検討した。その結果、主に沖縄諸方言（特に国頭語圏）において、現象や存在をあらわす文の主格的Nφを再確認した。これによって沖縄諸方言にも「活格」現象があった可能性が大きくなった。また複数一人称代名詞の内包形と排外形も確認し、指示詞の2項対立の実態も把握できた。おもな調査地は沖縄本島地方、久米島、久高島の諸集落である。

研究成果の概要（英文）：Based on our reexaminational results of the Okinawan dialects, we went over them one more time from the viewpoint of G. A. Klimov’s contentive typology. As a result, we found out again that there does exist the nominative-case Nφ form in the dialects of the Okinawan Islands, especially in that of the Kunigami area. In the area, they use the nominative-case Nφ form when describing a natural phenomenon or existence in their dialect. This shows a strong possibility that the people in those Islands do use or have used the active type dialect. Our research also shows that there are two types in their first-person plural pronoun: one is inclusive and the other exclusive and that there is a binary opposition in their usage of a demonstrative. Our survey locations were the hamlets and/or villages of the main island of Okinawa, Kumejima Island and Kudakajima Island.

研究分野：人文学

キーワード：クリモフ　内容類型学　活格現象　主語述語補語　危機言語　沖縄諸方言

１．研究開始当初の背景

（1）内容類型学（Contentive Typology)とは、ゲ・ア・クリモフ 1977（石田修一訳・1999）『新しい言語類型学－活格構造言語とは何か』（三省堂）、同 1983（石田修一訳・2016）『内容類型学の原理』）を代表的な著作とし、旧ソビエト連邦の言語類型学の成果をうけつぐ、語彙、文法（形態論・統語論）にわたる、言語の意味＝内容面を全体としてとりあげつつ研究する流れの一つである。内容類型学によって掘り起こされた活格タイプ（active type)については 2007 年 6 月日本言語学会春季大会において「活格性とはなにか」のテーマのもとに危機言語小委員会ワークショップでとりあげられ、クリモフの発表後 30 年を経て、日本言語学会でも一般に認知される方向へと進んできたといえよう。

（2) 研究代表者田畑千秋（以下田畑）と研究協力者松本泰丈（以下松本）は「内容類型学からみた奄美諸方言」（2009 年度～2011 年度、科研費・基盤研究（C)）というプロジェクト研究の推進にあたり、内容類型学的視座から奄美諸方言の文法構造を精査し大きな成果をあげた。具体的には、2009 年度に奄美大島方言、喜界島方言を現地調査、また 2010 年度には沖縄在住および本土在住の奄美方言保持者の調査、そして 2011 年度には徳之島方言を現地調査し、その成果として『奄美語研究ノート』を上梓した。

(3)内容類型学的視座を持つ発端は、ゲ・ア・クリモフがまだ日本に紹介される以前の 1982 年に松本が、『喜界島方言集』（岩倉市郎・1941）の格助詞（主格としての Nφ、N ガ形、N ヌ形）の用法の差異に気づいたことにはじまる。松本は、1982「琉球方言の主格表現の問題点」（『国文学解釈と鑑賞』607 至文堂）で、奄美諸島喜界島方言に活格タイプ性が認められる現象が存在することを指摘した。その後 1990「能格現象と日本語」、1991「琉球方言と中国語」、1993「名詞の〈主体＝客体〉の用法と問題点」、2005「マークされない名詞のかたちをめぐって」などで、奄美諸方言に例をとり、直接間接に活格タイプとのかかわりをみせる文法現象を提示した。

(4)田畑は、松本との 50 年近い研究交流をとおして内容類型学を学び、それを奄美諸島の口承文芸（神謡・歌謡・ことわざ・伝説・昔話・世間話・謎など）研究にいかしてきた。田畑は琉球方言の native speaker であり、かつ研究者として言語・民俗・口承文芸の研究に長年たずさわってきたので、言語資料の蓄積も多い、最近の内容類型学的研究としては、2007「奄美ウタ言葉の中の主格用法としての Nφ形」（『国文学解釈と鑑賞』908 至文堂）において奄美最古の歌集『大島の歌』の格標識を精査し、近世期の奄美歌語の中に、活格構造がみられることをあきらかにした。また、2007「奄美名音方言のニ格相当格」（『国文学解釈と鑑賞』914 至文堂）、2008「奄美大島ニ格相当格（ニ)」（『国文学鑑賞と解釈』920 至文堂）において、奄美大島の話し言葉の中の格標識を精査し、ヲ格相当の Nφ形と二格相当の Nφ形を抽出し、補語としての Nφ形の問題を提示した。また、2009「奄美大島名瀬方言の主語と述語、そして補語（１）（２)」（類型学研究会発表・京都大学）、2011「名瀬方言の格標識」（中日理論言語学研究会招待講演・同志社大学）、2011「奄美諸方言の主語・述語・補語―格標識の有無―」（日本総合学術学会招待講演・広島大学）等などにおいて、奄美諸方言の主語、述語、補語を統語論と形態論の両側面から論じた。2009～2011 科研の主な成果としては「名瀬方言の格表示」「奄美語の表現」（『奄美語研究ノート』）などがある。

(5)松本の 2009～2011 科研での主な成果は、「方言はなしことばと文構造のタイプ」「内容類型学と琉球方言 ―〈主体と客体〉表現をめぐって―」「日本語の特徴のとりだしのために」「琉球方言と古代日本語 ―『日本語と時間〈時の文法〉』を読んで―」（『奄美語研究ノート』）などがある。

２．研究の目的

（1）上記研究開始当初の背景から出発し、これまで手がけてきた琉球方言の文法現象を、内容類型学的観点からとらえなおし、それによってこれまでの研究に欠落していた側面をあらためて点検していこうとするものである。研究課題に冠した沖縄諸方言とは、琉球方言圏中、奄美諸島・宮古諸島・八重山諸島方言を除いた、沖縄本島を中心とした諸地域の方言をさしている。すでに研究代表者田畑千秋（以下田畑）と研究協力者松本泰丈（以下松本）は、同目的で、「内容類型学からみた奄美諸方言」（2009 年度～2011 年度、科研費・基盤研究（C)）を実施し、大きな成果をあげた。本研究はその研究を発展的に継承するものである。

（2）具体的には、いわゆる「危機言語」として各方面から調査の急がれる沖縄諸方言（国頭語・沖縄語）にあらわれる活格現象を問題にする。収集した資料は、類型学や文法のためにだけでなく、というよりむしろ内容類型学の言語の音声面とのかかわり（クリモフもまだわずかに言及しているだけである）を今後考究していくためにも、音声的にも正確な文字化が求められるので、それに寄与する。

（3）さきにも述べたように、内容類型学～活格性のとりだしは、これまで断片的な指摘はあるものの、体系づけられたのは 20 世紀末という、まだ若い研究分野である。また、日本語に関して活格現象を指摘する立場も、

いまのところめだっているとはいえない。さらにこの現象の考察を深めて、次世代の研究者に残していく。それによって琉球諸方言だけでなく、古代日本語を含めた日本語全体の記述も、いっそう深まることが期待される。

（4）上述したように、この活格構造を抽出する作業は、田畑と松本の研究によって、奄美諸方言においてはある程度の成果を上げてきた。しかし、沖縄諸方言研究においては内容類型学的視座からの研究はなされておらず、未開拓の分野である。ただ、2006『名護市史本編・10　言語』において、「自然現象を表わす名詞が主語になる場合はゼロ格になります」という指摘が出てきて、断片的ではあるが複数の事例が報告された。奄美諸島の与論島、沖永良部島は名護市を含む沖縄山原地域と同言語圏（国頭語）であり、奄美諸島との比較研究がいそがれる地域である。

（5）本研究は、沖縄諸方言のハナシコトバによるなまの資料を収集、そこに活格性が存在するかを確認するものであるが、文献資料と違い、生きた言葉ゆえのあつかいにくさがある。予想される問題点として、活格性をささえるべき格形にゆれが生じることが考えられる。そのなかには話し言葉ゆえの誤用といったほうがよさそうな場合もあるかもしれない。幸い田畑が琉球方言の native speaker なので、その言語感覚によって、その心配はおおいに解消される。

（6）あらためて言うまでもなく、琉球方言のような危機言語は、できるだけ多量のデータを、そろえられるうちにそろえておくことが、理論的な考察をすすめていくのと同程度以上に重要である。このように、内容類型学～活格現象にかかわる現象の掘り起こしをとおして、危機言語のこれまで注目されてこなかった諸側面を記録しておくこと、将来の言語研究にとって意義あるものとなると考える。

３．研究の方法

（1）内容類型学の理論を深く学び、その理論を展開させ、発展させる（理論研究）。

（2）これまで研究代表者田畑千秋（以下田畑）と研究協力者松本泰丈(以下松本）は、奄美諸島において現地調査を繰り返し、活格現象の存在と痕跡を指摘してきた。本研究では奄美諸島とともに北部琉球方言圏を形成する沖縄諸方言を（奄美諸方言、宮古諸方言、八重山諸方言を除く）に調査をすすめ、沖縄諸方言の話し手の談話資料を収集・記録し、内容類型学的な観点から分析・検討する（理論と個別のすり合わせ）。

（3）田畑、松本、研究協力者金子光茂（以下金子）で、これまでの調査、報告の相互点検をおこない、たりなかったところ、まちがったところをみつけだし、今後のより良き調査の指針とする（調査のあり方）。

（4）直接現地におもむき、伝統的沖縄諸方言の使い手から話し言葉を調査する。2013 年度はおもに沖縄本島を調査。2014 年度はおもに久米島を調査。2015 年度はおもに久高島を調査。2016 年度はおもに喜界島を調査する（現地調査）。

（5）各年度にわたり九州、関西地方を中心に本土在住の沖縄諸方言保持者を訪ね調査する（沖縄を離れた沖縄諸方言調査）。

（6）調査・収集した資料にもとづき、当該各方言の文法を体系的にまとめ、内容類型学的な特徴をとりだしていく（文法の体系化）。

（7）文法的記述を含めて内容類型学的な全体像を文章化していく（体系的文法記述）。

（8）類型学研究会などの関係諸学会で成果を口頭、もしくは論文として発表し、多くの研究者たちと問題意識を共有するとともに、批評も受け、理論言語学と個別言語学の相互にわたる問題を考える（学会発表と批評）。

（9）田畑、松本、金子は、地元研究者、あるいは一般市民と積極的に交流し、このプロジェクトで得た知見を地元に還元する（成果の地元還元）。

４．研究成果

（1）2013 年度

①研究代表者田畑千秋（以下田畑）と研究協力者松本泰丈（以下松本）、研究協力者金子光茂（以下金子）は、沖縄諸方言に関する研究書・報告書、および内容類型学に関する論文等の読みあわせをおこなうとともに、これまでの調査、報告、研究を相互点検して、現地調査の準備とした。

②田畑、松本、金子は類型学研究会に出席し、理論的研鑽をふかめ、研究会メンバーと意見交換をした。

③田畑と松本は、中国・瀋陽市で行われた国際シンポジウムに招待され、基調講演した。田畑の講演趣旨は、琉球方言研究を内容類型学的観点からとらえなおすことによって、これまでの研究に欠落していた側面をあらためて点検していこうとするものである。松本の講演趣旨は、言語研究において理論研究と個別研究をつなぐ方法論を説いたものである（学会発表参照）。

④田畑は、研究成果を「奄美の言葉」「奄美大島の遊び」と題して『西日本文化』に発表した（雑誌論文参照）。

⑤田畑、松本、金子は、沖縄県那覇市、糸満市、沖縄市、名護市に調査した。この調査は、沖縄諸方言の格標識についてであり、本研究の中核をなすものである。その結果、調査地域においては、現象動詞をともなう主体は格標識がないいわゆるハダカ形になることが多いということが確認された。

⑥田畑は、大阪在住沖縄県出身者がどのように沖縄諸方言を保持しているかを調査した。この調査において沖縄出身一世だけでなく、二世、三世にも調査枠をひろげ、大きな成果をあげた。

（2）2014 年度
①田畑、松本、金子は、沖縄諸方言に関する研究書・報告書、および内容類型学に関する論文等の読みあわせをおこなうとともに、これまでの調査、報告、研究を相互点検して、現地調査の準備とした。

②田畑、松本、金子は、類型学研究会に出席し、理論的研鑽をふかめ、研究会メンバーと意見交換をした。

③田畑と松本は、2013 年に中国・瀋陽市で行われた国際シンポジウムでの基調講演を「内容類型学からみた琉球方言」（田畑）、「文化研究の学際性について」（松本）と題し、国際学会誌に論文を発表した（雑誌論文参照）。

④松本は、このプロジェクト研究の成果を「〈国頭語〉のハダカ形主語おぼえがき―現象文を中心として―」として『類型学研究第 4 号』に発表した。

⑤田畑、松本、金子は、沖縄県久米島町に調査した。この調査は、内容類型学的観点からおこなわれ、、特に格助詞、指示詞の調査で大きな成果をあげた。

⑥田畑は、神戸、大阪在住沖縄県出身者がどのように沖縄諸方言を保持しているかを調査した。この調査において沖縄出身一世だけでなく、二世、三世にも調査枠をひろげ、大きな成果をあげた。

（3）2015 年度
①田畑、松本、金子は、沖縄諸方言に関する研究書・報告書、および内容類型学に関する論文等の読みあわせをおこなうとともに、これまでの調査、報告、研究を相互点検して、現地調査の準備とした。

②田畑、松本、金子は、類型学研究会に出席し、理論的研鑽をふかめ、研究会メンバーと意見交換をし、あわせて研究発表もした。田畑発表題「北部琉球方言のハダカ格」、松本発表題「名詞ハダカ格をめぐって（おぼえがき）」、金子発表題「筑後柳川藩領瀬高方言の格表示」である（学会発表参照）。

③田畑と松本は、中国・瀋陽市で行われた第二回中・日・韓比較文化国際シンポジウムに招待され、基調講演した。田畑の講演題は「美女に化ける豚 ―中国『搜神記』説話と琉球説話―」、松本の講演題は「日本語の空間表現の特徴から ―奄美語と標準文章語を対照させながら―」である（学会発表参照）。

④田畑と松本は、中日韓理論言語学研究会に出席し研鑽を積み、あわせて研究発表を行った。田畑発表題「奄美諸方言の一人称複数および双数」、松本発表題「奄美語喜界島方言にあらわれるシアリ融合形の用法おぼえがき」である（学会発表参照）。

⑤田畑、松本、金子は、沖縄県南城市において調査した。この調査で特に久高島における語彙、音韻、文法に関する多くのデータを蓄積した。

⑥田畑は、長崎、福岡、大阪、京都など日本各地に在住する沖縄県出身者の言語データを収集した。この調査は、語彙、音韻、文法にまたがる総合調査で、沖縄諸方言研究だけでなく、言語研究一般の進展に大きく寄与すると考えられる。

（4）2016 年度
①田畑、松本、金子は、沖縄諸方言に関する研究書・報告書、および内容類型学に関する論文等の読みあわせをおこなうとともに、これまでの調査、報告、研究を相互点検して、現地調査の準備とした。

②田畑、松本、金子は、類型学研究会に出席し、理論的研鑽をふかめ、研究会メンバーと意見交換をした。松本は、あわせて「クリモフ著・石田修一訳『内容類型学の原理』（三省堂）をよんで」と題して講演した。

③田畑は、中国・長春市で行われた国際シンポジウムに招待され、基調講演した。研究代表者の講演題は「琉球列島の妖怪 ―キジムナー・ケンムンの諸相―」である（学会発表参照）。

④松本は、中国・延吉市で行われた国際学術シンポジウムで基調講演した（学会発表）。講演題は「省略の諸相から ―文法記述からみた―」である（学会発表）。

⑤田畑、松本、金子は、鹿児島県奄美市、喜界町に調査した。この調査は、奄美諸島の格標識を沖縄諸方言の格標識と比較研究するためである。その結果、調査地域においては、現象動詞をともなう主体は格標識がないいわゆるハダカ形になることが多いというこ

とが確認された。

⑥田畑は、大阪在住沖縄県出身者がどのように沖縄諸方言を保持しているかを調査した。この調査で、沖縄出身一世だけでなく、二世、三世にも調査枠をひろげ、大きな成果をあげた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）
①田畑千秋、琉球列島猪妖的伝説、中日文化文学比較研究 2016、査読無、2017、94-103

②松本泰丈、省略の諸相から ―文法記述からみた―、第 8 回中日対照言語学シンポジウム予稿集、査読無、2016

③松本泰丈、〈国頭語〉のハダカ形主語おぼえがき ―現象文を中心として―、類型学研究、査読無、第 4 号、2014、1-12

④松本泰丈、文化研究の学際性について、中日韓比較文化研究、査読無、1 巻、2014、30-35

⑤田畑千秋、内容類型学からみた琉球方言、中日韓比較文化研究、査読無、1 巻、2014、55-60

⑥田畑千秋、奄美大島の遊び、西日本文化、査読無、462、2013、32-34

⑦田畑千秋、奄美の言葉、西日本文化、査読無、462、2013、30-31

〔学会発表〕（計 12 件）
①松本泰丈、クリモフ著・石田修一訳『内容類型学の原理』をよんで、類型学研究会、2016.10.8、同志社大学（京都府・京都市）

②松本泰丈、省略の諸相から ―文法記述からみた―、第 8 回中日対照言語学シンポジウム、2016.8.20、中国・延辺大学（中国・延吉市）

③田畑千秋、琉球列島（奄美・沖縄）の妖怪―キジムナー・ケンムンの諸相―、中日文化文学比較研究国際シンポジウム、2016.6.12、中国・長春理工大学（中国・長春市）

④日本語空間表現の特徴から ―奄美語を標準文章語と対照させながら―、第 2 回中・日・韓比較文化研究国際学術シンポジウム、2015.10.17、瀋陽航空航天大学（中国・瀋陽市）

⑤田畑千秋、美女に化ける豚、第 2 回中・日・韓比較文化研究国際学術シンポジウム、2015.10.17、瀋陽航空航天大学（中国・瀋陽市）

⑥金子光茂、筑後柳川藩領瀬高方言の格表示、、類型学研究会、2015.6.27、同志社大学（京都府・京都市）

⑦松本泰丈、名詞ハダカ形をめぐって ―おぼえがき―、類型学研究会、2015.6.27、同志社大学（京都府・京都市）

⑧田畑千秋、北部琉球方言のハダカ格、類型学研究会、2015.6.27、同志社大学（京都府・京都市）

⑨田畑千秋、奄美諸方言の一人称複数および双数、中日韓理論言語研究会、2015. 4.26、同志社大学大阪サテライト（大阪府・大阪市）

⑩松本泰丈、奄美語喜界島方言にあらわれるシアリ融合形の用法おぼえがき、中日韓理論言語研究会、2015. 4.26、同志社大学大阪サテライト（大阪府・大阪市）

⑪松本泰丈、文化研究の学際性について ―言語研究における個別と一般―、第一回中・日・韓比較文化研究国際学術シンポジウム、2013.10.11、中国・瀋陽航空航天大学（中国・瀋陽市）

⑫田畑千秋、内容類型学からみた琉球方言―格標識をめぐって―、第一回中・日・韓比較文化研究国際学術シンポジウム、2013.10.11、中国・瀋陽航空航天大学（中国・瀋陽市）

６．研究組織
(1)研究代表者
田畑　千秋（TABATA CHIAKI）
　大分大学・教育学部・教授
　研究者番号：60264321

（2）研究協力者
松本　泰丈（MATUMOTO HIROTAKE）
　復旦大学客員教授
　研究者番号：90082932

金子　光茂（KANEKO MITUSIGE）
　大分大学名誉教授
　研究者番号：60107836